

らない。表象と概念が表象作用と概念作用として言語過程のうちにとり込まれているということは全く正しいのだが、そのかぎりでは事物とは区別されていることになる。もしある表象を言語にもたらそうとするなら、その表象は事態としての資格において言語にもたらされているのである。したがって、彼の意味の定義「素材に対する言語主体の把握の仕方」ということも、主観主義的に理解してはならないだろう。意識の志向性が主観性に縛られているとしても、言語の存在はそのような主観性を越えさせるものである。

(都立大学文学部助手)

#### 参考文献

- 時枝誠記 「国語学原論」  
「国語学原論統篇」  
佐久間鼎 「日本語の言語理論」  
Heidegger: Sein und Zeit 9. Aufl.  
Hans-Georg Gadamer: Wahrheit und Methode. 2. Aufl. 1965 (Mohr)

#### 次号予告

- 特集 国語の力(言語能力)はどうテストすればよいのか  
○国語の力(言語能力)とは何か  
国語教育界におけるその定義(一覧)  
○国語教育者の意見と文献目録  
○現場における言語能力の調査とそのテスト化について  
○第二号合評会記事  
付録 優良国語テストを集めて (幼・小低学年の部)  
○語学力・国語力 玉川大学講師 諏訪 功

#### ◆くもりぼっこ◆

動物園を見学しての作文、二年生の男子

「フンボルトペンギンは くもりぼっこをしていました。」  
と書いたの  
「くもりぼっこってなあに？」  
「ひなたぼっこをくもりの日にすることだよ。」

#### ◆子どもの日記から◆(二年男子)

「そとは、朝からたいふう。  
そとを見ると、木がいまでもおちそうに、ゆれている。」

教科書の中に「ぬかる」という語が出てきた。  
「ぬかるってどんなこと？」  
「ぐにやぐにや。」  
「べたべた」  
「どろどろ」  
「べたべた」  
「びちゃびちゃ」  
「ねばねば」  
「ぬるぬる」  
「ぐちよぐちよ」

これを全部いってみると、いかにも「ぬかる」ということが、わかるのではないか。  
二年生の授業で。

(右三例東京・桐朋学園  
小学部・椎名伸子氏報告)

#### ◆木きん校舎◆

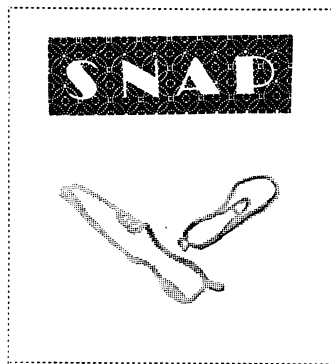
ある日、転校した児童(四年)から、

ていねいな手紙が来た。「ぼくたちの学校は、木きん校舎で古いです。」と。読んでいた教師、何の抵抗もなく読み過し、しばらくして苦笑した。鉄琴から、木琴をそして鉄筋から……か。鉄筋からか、木琴からか、……

(府中市立第二小学校飯島千鶴子氏報告)

#### ◆ごっこ遊び◆

幼稚園でのごっこ遊び。五歳児。  
「こんどは何屋さんごっこしようかな」



と、一息入れた子どもことばに、つい誘われて、私がこう言った。  
「幼稚園ごっこしようか」

子どもは間髪を入れず、  
「できないよ。ここ、幼稚園だもの」  
まわりの子どもたちまでが声をそろえて、私の愚かさを笑った。

(横浜・グリーンヒル幼稚園・田村京子氏報告)

#### ◆気・毛◆

いたずらざかりの四歳の我が子。も

う近ごろはしかり慣れ、しかられ慣れているせいであろう。

母「ママは気が短いから、いつまでも泣いていると押入れに入れるわよ」  
長男「ママは毛が短いことなんかないよ。毛が長いよ」  
さっきまで泣いていたのである。聞きながらいよいよ突如反論に及ぶところ、子どものことばに対する注意の深さを思い知らされた。

(愛知県愛知郡 岩佐誠氏報告)

#### ◆いろいろな石◆

小学校一年理科の時間。みんなに石ころを集めて来させて、川の石、山の石、と教科書にある区別をさせていた。しばらくたって、クラスで最も成績のよい優秀児が、石を持ってやって来た。

「先生、この石なんだかわからないんだけど……」

この質問を聞いたとたんに、私のほうがわからなくなつた。花崗岩、水成岩、安山岩……私は矢継早に、石の種類を思い浮かべた。……私の知識は乏しい。どうしよう、……いや、正直に越したことはない。

「明日までに調べておいてあげる。ね」  
その子は黙って背を向けた。よかつた。ところが一瞬、電撃のごとく私の頭は、ぐわんと鳴った。何たる悲運か？ その子は、その石が川の石が山の石かの区別をたずねに来ていただけだったとしたら……万事休す。

(埼玉県浦和市 宮田知子氏報告)